別紙様式３

令和５年度　【　学園研究費助成金＜ B ＞　】研究成果報告書

学部名　文化情報学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　ミヤシタ　トアリ
氏　名　宮下　十有

研究期間　令和５年度

研究課題名　アーティスト・学生と協働する「表現活動とものづくりのワークショップ」の開発と実践

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者	宮下　十有	文化情報学部	准教授
分担者	亀井　美穂子	文化情報学部	教授
分担者	鳥居　隆司	文化情報学部	教授
協力者	日栄　一真	文化情報学部	非常勤講師
協力者	松原　道晴	椙山女学園大学附属小学校	教頭
協力者	江島　徹郎	愛知教育大学教育科学系教育ガバナンス講座・同附属岡崎中学校	教授・附属中学校校長

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

本研究は、電子楽器、電子工作など表現活動とものづくりによるワークショップの開発と実践において、アーティストと学生が協働してワークショップ教材、プログラム開発し実践する研究である。先行実践として 2021 年の little Bits SYNTH KIT を用いた電子楽器シンセサイザー制作ワークショップの開発では、学生と専門家と教員の協働の実施に関係した学生に対する観察と調査から有用性について提示できた。本研究では、これまでも活動してきたアートと遊びとものづくりをキーワードに学生と協同でデジタルファブリケーションや電子工作のワークショップ、映像制作ワークショップに加え、音や音楽に関する専門的知見、ワークショップの経験豊富なアーティストと学生、教員がそれぞれの知見に基づき、学生自身がワークショップを開発、ファシリテーターやサポーターとしての役割を担い、その内容を評価する。またこれらの実施にあたって、附属小学校や近隣大学の協力を得ながら実施した。

２．研究の推進方策（300 字程度で記述）

先行実践で little Bits SYNTH KIT のワークショップを開発したが、学生の卒業、コロナ禍での機会喪失で、プログラムを継承できなかった。本研究では、改めて学生がアーティストと共同し、自身の体験から得たシンセサイザーと音作りの楽しさを伝えるワークショップを開発、学外でワークショップを実施し、教員がそれを支援する実践研究である。以下の手順で進めた。
１：ワークショップ実践に前のリサーチと準備：代表者は分担者と共に先行研究のリサーチと実践を踏まえ、アーティスト・日栄氏に協力を得る。ワークショップの実施会場を選定
２：学生のワークショップ体験の提供と学生の実践：学生に、little Bits のワークショップを複数回提供。学生自身がワークショップ体験と振り返りに基づき「楽しさ」を伝えるワークショップの開発と広報用のビジュアルイメージを作成。イベント実施広報にあたって椙山女学園大学附属小学校、愛知教育大学附属小・中学校の協力を求める。
３：ワークショップの実施と振り返り：学外でワークショップを 2 回実施。その後学生と関係者による振り返りを実施。
４：検証：当該ワークショップに関して代表者・分担者とワークショップを分析、検証。

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

前出の方策に従い、以下のように研究を進めた。
１：ワークショップ実践に前のリサーチと準備(7-9 月)代表者は分担者と共に先行研究のリサーチ（-8 月）と実践を踏まえ、アーティストの日栄氏に協力を依頼。学生が実施するワークショップ会場をリサーチ（6–8 月）し Fab Cafe Nagoya に決定した（9 月）
２：学生のワークショップ体験の提供と学生の実践（9-10 月）：学生に、会場・Fab Café Nagoya の場の機能と活動をブリーフィング。日栄氏により学生が Little Bits のワークショップ（10/3）再度、宮下が先行研究で開発したワークショップを学生に提供（10/10）これらの体験と振り返りにより学生がシンセサイザーと音の制作および絵画による表現活動を組み込んだワークショップの開発と広報用のビジュアルイメージを作成。11 月にリハーサルを実施。チラシ配布にあたり椙山女学園大学附属小学校、愛知教育大学附属小・中学校の協力を得る。
３：ワークショップの実施と振り返り：11/ 25 に FabCafeNagoya にてワークショップを 2 回実施。定員 8 名に対し各回 7 名が参加。12/9 オンラインにて学生と会場スタッフ、日栄氏、宮下で振り返りを実施。
４：検証：ここまでの実践をまとめ、代表者・分担者とワークショップを分析、検証。論文を執筆した。また、その後、学生が自主的に当該ワークショップをあいちワークショップギャザリング mini（2/17）に出展・実施。
本研究は、学生がアーティスト共にワークショップの開発を行う点、ワークショップの広報に、椙山女学園大学附属小学校および愛知教育大学附属小・中学校の協力を求める点、アーティストおよび教員が学生をサポートしながら、学生自身のワークショップの成長を促す点、学生自身がワークショップ教材を考案だけでなく実施の際のビジュアル作りなど積極的な関与を促す点、文化情報学部の主たる学びである「文化」と「情報」を取り扱い、学生および参加者の表現活動を促進する点を重視し進めた。これらはいずれも十分推進することができ、研究成果として論文にまとめ、3 月に発行予定である。
一方で、ワークショップの継承をはじめとする今後の展開、学外活動の経費の関係で、現地調査、文献調査にとどまったことが課題である。今後も研究を継続し、発展させたい。

４．キーワード（本研究のキーワードを１項目以上８項目以内で記載）

①ワークショップ	②ワークショップ開発	③アーティスト・学生との協働活動	④シンセサイザー制作
⑤表現活動	⑥学外活動	⑦	⑧

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

宮下十有　日栄一真　亀井美穂子　鳥居隆司　専門家と学生・教員との協働によるワークショップの開発―「ワークショップをつくるワークショップ」の継続的研究から-　椙山女学園大学文化情報学部紀要　第 23 巻　pp.1-10 2024 年 3 月 31 日発行予定